

## 「新ハムレット」論序説

—浦口文治への関わりを中心に—

鶴 谷 憲 三

### はじめに

「苦惱」という「藁一すぢの自負だけは、はつきり持つてゐた」とは、「富嶽百景」での「太宰さん」の並々ならぬ覚悟を示す言葉として夙に有名である。一つの章句をその実質を省みず無媒介に括ることは危険ではあるのだが、「苦惱」と云えば、夏目漱石の存在が想起される。すなわち、「死ぬか、気が違ふか、夫でなければ宗教に入るか」しか救済の手立てはないと「行人」の長野一郎に語らせ、あるいは「現代人は偽善家になるのを恐れて露悪家になる」とも「三四郎」の広田先生の口を借りて言わせているのがそれである。

作中人物の口を借りたこれら漱石の言説を認めることに吝では無い。もともと、一郎の救済方法で云えば、下意識の領域で半ば進行する発狂はともかくとしても、自殺や入信ということになると、それなりの「覚悟」・エネルギーが必要かと思われる。なぜなら、生物(ルビ鶴谷、以下ことわりない限りルビ・傍点は同様とする。)としての人間には、個体維持の自然な生命力が無意識に作用を及ぼ

していると考えられるからである。志賀直哉「城の崎にて」の鼠の件などはこのことを最も歴然と語っている。動騒する鼠を目撃した「自分」は事故当時の内面に思いを馳せ、「致命的のものかどうかを問題としながら、始ど死の恐怖に襲はれなかつた」としつつその一方で、次のような心的状態にもなるのである。

「フエータルな傷ぢやないさうだ」かう云はれた。かう云はれると自分は然し急に元気づいた。亢奮から自分は非常に快活になつた。

「此のデンマークの為」とはいえ「頗る不安に思つて居」たという「王」の述懐ではじまる太宰治の『新ハムレット』(文芸春秋社、昭和16・7)は、彼の作品中でもその評価の揺れが際立つものの一つである。「太宰氏の最もつまらぬ作品よりもつとつまらぬもの」という手厳しい評言の一方に、「この期の最大傑作」であり、「典型的な近代心理小説」足り得ているという過褒なまでの評価も存在するのが実状である。

磯貝英夫氏によれば、この作品は太宰治「得意の自意識問題をはじめて客体劇に仕立てることをもくろんだ」とされるが、客体劇云

々を別にすれば、自意識問答の先駆たる作品に、志賀直哉の「クロード・ディアスの日記」がある。論としては二人の文学者の描く、クロード・ディアス・ハムレット像、とりわけクロード・ディアスの形象化を對比させることにより、両作家の同質性と異質性とを振り分け、その実体に少しでも迫ることを目論むものであるが、この小稿ではその前に、太宰治が参看したという浦口文治の「新評註ハムレット」及び英文文学者としての人となりの一端を確認し、本論へのプレリユードを奏するつもりである。

1

私見では、「新ハムレット」が論ぜられる場合、幾通りかの型があるようである。より正確に言えば、以下に述べる論点のいずれかの比重が大きいのであって、実際には相互が微妙に錯綜し、重奏化し合っているのが実状であるが、ことを際立たせるための単なる私見と言った方がより適当かも知れない。管見に入った先学の諸論考を踏まえつつ、まず、その切り口と問題点とを簡潔に確認したい。

第一は、原典であるシェイクスピアの「ハムレット」との、受容・比較を検証することによって、「太宰化の過程」（小田島雄志「新ハムレット」『国文学』昭42・11）を考察する試みである。小田島氏が代表的な評家の一人であり、太宰の特徴が明白なのは「愛憎の心理の深層化、欺瞞の主題の複雑化、悲劇の日常化」という点であるとする。太宰が「新ハムレット」を書いた意図は、

悲劇的情緒に没入してカタルシスを体験することではなく、  
疑惑・苦惱・絶望に傾斜しがちな二十三歳の青年の心理を、三

十三歳の作者の微苦笑をもつて描くことであつたと、氏は説くのである。太宰の言葉で云えば、シェイクスピアの「ハムレット」には「情熱の火柱が太」く、「登場人物の足音が大きく」感ぜられ、「天才の巨腕」だという点と響き合う。さらに又、検討すべきことは、太宰が「新ハムレット」を書く上で直接参酌したテキストの問題なのであるが、この点は後に詳述する。

第二は、時代性、つまり発表された昭和十六年という時流に力点を置く立場である。周知の如くこの年は、太宰が執筆中の四月に日ソ中立条約が調印され、日米交渉が大詰めとなっている。十二月八日にはハワイ真珠湾空襲が開始され、同十二日には支那事変を含めて大東亜戦争とすることが閣議で決定されている。

こうした時代背景を考慮して「国家とか正義とかを口実に体制側の仮面をつけて罷り通っている者たちの中に、本物の悪を発見しようとする試み」と位置づける評家もいる。<sup>注4</sup>この観点に対して「究極的には、やはり、作者はかつて対立してきたおとなへの疑惑を捨てず、それを、当時の戦時風潮にまでひきまわすんで、暗に時代批判をしこんだものと見てよい」という評言もある。<sup>注5</sup>時代批判という点で云えば、前者の方がより積極的であり、後者はより慎重な言い回しである。

この問題に言及する場合、いま一つの重要な問い掛けが不可決となってくる。昭和十六年の発表時の「新ハムレット」では、太宰の言葉に関する限り、明確な「近代悪」は浮かびあがってはこない。言うまでもなく、この言葉が明示されるのは「新しいハムレット型の創造と、さらにもう一つ、クロード・ヂャスに依つて近代悪といふも

の描写をもくろんだ。」とする「猿面冠者」あとがき（鎌倉文庫、昭22・1）においてである。この選集を太宰が編んだ時点が昭和二十年冬だとしても、この間の落差をいかように把握すべきものなのか。多くの論者はとりたててこの点を問題にはしない。この場合、昭和十五年の秋に東京商大で講演した「近代の病」という講演の内容を前提としているのであろうか。しかし、これとても詳細は不明である。また、「この小説に対しても、太宰は大変な熱の入れようで、当時私には、『ネガティブの悪人の創造に腐心している』と書いていた」という堤重久の証言も、丸呑みにするには危険がともなう。人間の回想には、先行のものによって変質するという習性がつきまとうからである。「新ハムレット」が刊行された直後に執筆されたと思われる「世界的」（『早稲田大学新聞』昭16・10・15）には、「新ハムレット」の余波が揺曳しているようだが、これとても必ずしも明瞭ではない。

このごろ日本人は、だんだん意気込んで来て、外国人の思想を、たいした事はないやうだと、ひそひそ囁き交すやうになつたのは、たいへんな進歩である。日本は、いまに世界文化の中心になるかも知れぬ。冗談を言つてゐるのではない。

こう言う太宰が、『新ハムレット』執筆後に「自分の力の限度を知りました」（昭16・8・2、井伏鱒二宛書簡）と述べているのを知るとき、「冗談」ならぬ冗談であり、軽蔑でしかあり得ないと思うのは筆者だけであらうか。むしろ、「太宰の最初の意図に、このような『近代悪』のしてのクローディアス像が自覚されていたかは多分に疑問」とか、「戦争批判のモチーフを強調する事は、もはや作

「新ハムレット」論序説 — 浦口文治への関わりを中心に —

品の正当な解説の域を超えた所作」などという評言がより真実を衝いているのではなからうか。いずれにせよこの問題は、尽きるところは五年余りの太宰の歩みをいかように評価するのかという鳥瞰図を示し得ない限り、早計には決められないであらう。

第三は、これまでの文学生活をふまえた太宰の「私小説」性に力点をおく立場である。これには、井伏鱒二へ宛てた太宰の自注に負うところが大きい。

私の過去の生活感情を、すっかり整理して書き残して置きたい気持ちがありました。その意味では私小説かも知れません。

「若い者」と「大人」の世界の成功しなかった和解（赤木俊「太宰治著『新ハムレット』」、「現代文学』昭16・10）を先駆として、「青春への訣別」（『東京八景』）という従来の「生活の総決算」という渡部芳紀氏の評言（『太宰治論—中期を中心として—』『早稲田文学』昭46・11）へと続く系譜である。抽象的に云えば作品と作家との距離の問題であり、狭いところにはか素材を求めなかつた点で云えば、生家、故郷との問題と換言できよう。兄津島文治の眼から云えば「当時の家長としては、かなりの理解をもつて」いたと自負しつつも、太宰の行動は「理解をはるかに超え」ていたため、太宰の小説には「楽しめなかつた」のである。例えば、次の一節などはこの典型である。

いくら何でも「右大臣実朝」には家のことや私のことが出てこないだろうと思つて思つて読んだのですが、やっぱり出てきたので閉口した記憶があります。

第四は、先行する作品への意識、つまり、志賀直哉の「クローデ

「イアスの日記」や小林秀雄の「おふえりや遺文」に対する文学者としての意識の問題である。小林に關しては「僕は昨夜小林の悪口をさんざん言つちやつて、今日は言ふ気がしないな」（『現代小説を語る』）（『文学季刊』昭22・4）という座談会での発言しか直接言及したものがないと思われるが、太宰が十二分に意識していた文学者の一人であることは間違ひなからう。昭和十五年六月二日の小川正夫宛の書簡には「女の決闘」（河出書房、昭15・6）の寄贈者名が四十名挙げられているが、小林秀雄またその内の一人である。したがって、太宰がこれらの作家の存在を意識した上で、自らの世界を対峙させ、その世界を定位すべく試みたということは説得性があるろう。

問題は直哉の「クローディアスの日記」との相関性である。発表直後「志賀直哉の『クローディアスの日記』を思ひ出しましたよ。」とする佐々木基一の同時代評（『昭和16年の文学を語る』『現代文学』昭16・12）を嚆矢とするが、「志賀直哉の『平衡感覚の文学』と太宰治の『崩壊感覚の文学』の対立」（成田竜雄「太宰治の『新ハムレット』」（『大谷女子短期大学紀要7』昭39・3））などがすでにみられる。ただ、単に対立の図式かと言えば、おそらくそうではあるまい。先に引用した佐藤泰正氏は「『日記』的発想ならぬ虚構を、モノローグならぬ戯曲的方法をと言いつつ、『新しい小説』を旨指したはずの『新ハムレット』もまたモノローグの形相に終わったとすれば、志賀と太宰をめぐる対峙相反の構図もまた、ひと皮むけばこの風土の特性をついに超えるものではなかったか」（傍点佐藤）と問題を提起している。愛には憎しみが普通対比されるが、「人間

失格」の大庭葉蔵のアントニム遊戯に倣えば、愛の対義語は無関心であると思うのである。織田作之助や坂口安吾、太宰治などの、いわゆる無頼派の人々がなぜ白樺派、とりわけ直哉を仮想敵にしなればならなかったのか、あるいは、戦後派と呼ばれる人々がこの問題を継承することなく、ひとまたぎで超え得たのか、戦争体験という直接性という点だけでなく、深い掘り下げが必要かも知れない。

四点に絞って、「新ハムレット」への接近の方法と、それに伴う私見を述べてきたが、何れにせよこの作品に「中期から後期への変貌の秘密を解く一つの鍵」（小泉浩一郎「『新ハムレット』論」（『日本文学研究11』昭47・2））を求めることに異論はない。いやむしろ、通説化している太宰文学の三分説を、「新ハムレット」を分水嶺とした二分説すら可能ではないかと思われるのである。

## 2

『新ハムレット』には、「過去の或る時代に於ける、一群の青年の、典型」、より詳細に言えば「その始末に困る青年をめぐつて一家庭の、（厳密に言えば、二家庭の）たつた三日間の出来事」を通じて、「狭い、心理の実験」を試みた「勝手な、創造の遊戯」であって、これには「学問的・または政治的意味」は全くなく、あくまで「LESEDRAMA ふうの、小説」だとする太宰の自注がある。ついで太宰は、この作品を書くにあたって依拠したのは、次の二作品であると明記している。

此の作品を書くに当り、坪内博士訳の「ハムレット」と、それから、浦口文治氏著の「新評註ハムレット」だけを、一とは

り読んでみた。浦口氏の「新評註ハムレット」には、原文も全部載つてゐるので、辞書を片手に、大骨折りで読んでみた。いろいろの新知識を得たやうな気もするが、いまそれを、ここでいちいち報告する必要も無い。(太宰の引用は、『太宰治全集』筑摩書房、昭50・6〜昭52・11を用い、また、以下では両書を「坪内訳」、「新評註」と簡略化する。)

この太宰の言を疑わない限り、坪内逍遙と浦口文治の存在を無視するわけにはいかない。戯曲という点から言えば「当初から実演ということ当头から離さず、しかも語学的・文学的厳密さで完訳したのは」「ただ一人」あり、<sup>注11</sup>「将来も逍遙以上に出ることは不可能」とまで高い評価を受けている坪内逍遙のことは扱置く。原典であるシェイクスピアの「ハムレット」はその多義性・重奏性を特色とする作品である。とすれば、「いろいろの新知識を得た」という浦口文治の存在を明確に見据える必要がある。浦口への共感であれ、反撥であれ、その存在が梃子として働いているとみて過言ではないからである。

いま佐々木隆氏の編になる『日本シェイクスピア総覧』(エルピス、90・4)によって英文学者浦口文治に関わるテキスト訳注書・翻訳書・論文を確認すれば、左記の如くなる。

(テキスト訳註)

「新評註『ハムレット』」(三省堂、昭7・10)

(翻訳)

「新訳ハムレット」(三省堂、昭9・12)

(論文)

「新ハムレット」論序説——浦口文治への関わりを中心に——

- (一)「自然描写に於けるミルトンと沙翁」(『英語青年』昭5・11)
- (二)「Orieの両面」(『英語青年』昭5・11)
- (三)「Hamlet 性格展開の第一転機」(『英語英文学論文』昭7・1)

(四)「Hamlet 劇における 'He's fat' の意義」(『英文学研究』昭7、月不詳)

- (五)「沙翁劇における Fat の二用法」(『英語青年』昭8・3)
- (六)「Panfletto」沙翁劇に於ける「Fat」(七)「Hamlet 劇に於ける 'He's fat' の二用例」(八)「Shakespeare 劇に於ける 'Fat' の二用例」(自家版、昭6・7)

「新ハムレット」に言及している論者は数多いが、この浦口文治の存在に着目した評家は多くはない。その筆頭に挙げるべきは、平岡敏夫氏の「『新ハムレット』論」(『作品論太宰治』双文社出版、昭49・6)であろう。この論考がその後の論文に及ぼした影響は大と言わねばなるまい。しかしながら、氏の立論の依拠している書が、「新評註」ではなく、翻訳である「新訳ハムレット」であることを視野に入れておく必要がある。時をそれほど分かつたず、しかも注釈を踏まえつつ訳出したもの故、おそらく氏の指摘の通りであろう。だが、篤学の上である平岡氏が「新評註」を直接照合していないにもかかわらず、「さらに具体的」であるとか、「一段と明確に示されている」とかと説く時、筆の走り過ぎとみるのは筆者だけであろうか。現に氏自身が明確に次のように記しているのである。

「新評註」の方は見る機会を得ていないのだが、その「ハムレットの健気な青年的性格」という趣旨に関しては姉妹篇たる

「新釈」がさらに具体的で、「政治の正義化と家庭の純潔化」とあり、その「あとがき」が十五節よりなる解題となっていて、著者のハムレット像は一段と明確に示されていると思われる。「新評註」のそれと重なることは疑いないが、むしろ、それは後日検討すべきこととして、「新釈」の「あとがき」から、ハムレット像を少しみておこう。

当時太宰が参看できた翻訳書は坪内逍遙や浦口文治のそののみと  
は言い難い。文学的出発を遂げた昭和八年から執筆した昭和十六年  
のほぼ九年間に限定しても、他に本多顕彰、横山雄策、日高口一(逍  
遙と共訳)、岡橋祐・三神勲の手になる訳書が存在する。とりわけ、  
本多顕彰のそれは太宰とゆかりの深い小山書店から出版されてお  
り、先の小林秀雄同様「女の決闘」の寄贈者の一人でもあるのであ  
る。さらにまた訳注にしても、全く同時期に都築東作の「註釈集中  
『ハムレット』」(研究社、昭7、未見)が出版されている。昭和  
八年二月二十八日発行の研究社「英文学研究」には、浦口と都築と  
のそれがあたかも注釈の対比をなすものとしてY・N氏によって書  
評されている。Y・N氏によれば、都築東作の「註釈集中」は「私  
見による取捨は殆んど加へず、互に相矛盾する解釈なども許す限り  
列挙して鑑賞者の判断」に委ねるところに特色があるという。

都築のそれが字義通りの集注に徹しているのに対し、浦口の「新  
評註」は「主張見解が極めて断定的に呈示され」、まさに「快刀乱  
麻を断つ」が如きありさまとされている。そして、浦口「新評註」  
の顯著さは次の二点であると説かれる。

第一点は、Elizabeth 朝の天文学・占星学アストロ民俗信仰等に関して

わめて造詣が深いということである。太宰が言うが如く浦口の「新  
評註」は上段に原文が、下段に注釈がついているが、例えば次のよ  
うな箇所を言うのである。「ハムレット」の一幕一場におけるホ  
ーシオのハムレットの父の亡霊への科白の部分である。  
(原文)

If thou hast any sound, or use of voice,

Speak to me ;

If there be any good thing to be done,

That may to thee do ease and grace to me,

Speak to me ;

この部分の逍遙訳は

汝声あらば、能う物を言ふならば、予われに語れ。…予には功徳  
ともなり、汝には心安めともなる事のあらば、予に語れ。

(ルビ逍遙)

<sup>註12</sup>であるが、これに付した浦口の評注は次の如くである。

Elizabeth 朝大衆の信じた処によれば、Ghost に四つの所  
能はた所作があつた。其音声をもつて人間に語り掛ける事が其  
一、何か善事の成就に対して人間の加勢を期待したことが其  
二、其三是国家凶事の機密を人間に漏らす事で、其四は其在世  
中に折角積上げて地中に蔵してゐる宝に執着しつゝ、死後も屢  
々地上を歩む事である。

第二点は「感傷的 Hamlet 観から解放されて、正義の具現者と

して意志的 Hamlet 観を主張してゐる」ことである。具体例は枚挙に遑が無いが、このことは浦口自身の「自序」が端的に示すところのものでもある。

ハムレットは政治の正義化と、愛情の純潔化といふ二大理想の実現に生きて行つた天晴健気な青年である。かやうに若々しい理想の主張に対して、彼の場合に於てもまた必然的に直ちに起つて来たのが当時の社会的環境に対する葛藤と衝突とである。

あくまでエリザベス朝の時代風潮で読めばと浦口は但し書を付すが、これがそのままわが国の昭和七年、ひいては昭和十六年の時代の風潮とも響きあうところに「新知識を得た」、すなわち、時代性、太宰の文学観、「私小説」性等の問題と関わつてゐるのである。ちなみに、先の「日本シエイクスピア総覧」によれば「新ハムレット」執筆の前年の『英語青年』（昭15・6）の「片々録」欄には四月二十日、麻布英文学会で浦口文治が「Hamlet's Character as seen through his Rhyme Tags」と題する講演をしたことが十六行にわたつて掲載されてゐるところ。

「浦口氏の沙翁研究論」なるものがこれであるが、正確を期せば、草創期の英字新聞「THE JAPAN ADVERTISER」四月二三日（火）に掲載された「Professor Deduces Character Of Shakespeare's Hero Through Rhyme Tags」とういふ副題のもとに講演された「LECTURE ON HAMLET GIVEN AZABU GROUP」とういふ記事の紹介である。浦口文治が詩の押韻を通じて、ハムレットの性格を推論し、さらにシエイクスピア英語の解釈につ

いてより論理的・総合的方法の必要性を説き、好評を博したというのが主たる内容である。冒頭部分を引用すると次のようなものである。

A Lecture on Hamlet's Character as Seen Through His Rhyme Tags was given on Saturday evening in the Azabu Methodist Church before the Azabu English Literature Society by Professor Bunji Uruguchi, who has been devoting considerable time to the study of Shakespeare.

太宰がこういうものまで視野に入れていたとは思えないが、当時の浦口文治の一端がうかがわれることは確かであろう。

3

これまでみてきた浦口のハムレット像に反撥し、むしろその敵である「クローディアスのあり方」にこそ、太宰治と「ひとしいもの、同根であると言える点に注意をほらう必要がある」とは、平岡氏の説くところである。悪とは「無意識の殴打」（「かすかな声」）であり、また、「自信の無き」を大事にし、「卑屈の素直な肯定の中から、前例の無い見事な花の咲くことを」「祈念」する（「自信の無き」・傍点太宰）とどう太宰が、浦口流の一義的な正義を考へるハムレット像に反撥を覚えたであらうことは想像に難くない。その点では同感なのであるが、戦前と戦中との落差を考慮しない点、

さらには直哉描くクロトディアスを「『気の弱い善人のやう』な人物であり、正義と愛に關し、確信的な人物」と把握し、「このように見える人物こそ近代の悪なのだ」と太宰は言っている」と評言する時一面的に切りすぎるのではないかという疑念が生じるのである。

ところで、平岡氏の所論をさらに押し進め、浦口の『新評註』と太宰の『新ハムレット』とを精細に比較・検討した評家に山崎正純氏がいる。氏は「『新ハムレット』論―表現の虚妄を見据える眼―」（『近代文学論集12』昭61・11）なる論考で、「浦口の注釈が描き出す」「苦悩するクロトディアスの姿」こそ太宰が依拠した本質であると強調し、この形象化にこそ、当時の太宰の苦悩が重奏し合っている」と読み取るのである。氏の言うクロトディアスとは、

過去におけるヘロマンチズムの抑え難い渴望に従ってガーツルドとの恋に殉じ、まさにその故に對社会的に様々な無理難題に悩まされ、遂に当の女性にさえ裏切られる男

なのであって、それはそのまま、世俗の中で「大人」として生きようとしながら「根本の所では未だにロマンティズムと骨がらみに結びつ」くと太宰の苦悩を分析するのである。この氏の評言はきわめて示唆に富む。「自信の無さ」（『東京朝日新聞夕刊』昭15・6・2）と言いつつ、その一方で「生活は弱く、文学は強く」と主張する太宰が存在するからである。太宰治ほど画一化したものの方、概念化・先入観を忌み嫌った作家は少ない。

この問題は、今あたためているテーマ、すなわち、「二人のクロトディアス―直哉「クロトディアスの日記」と治「新ハムレット」と―」へと繋がり、また、真の男らしさ・女らしさ、真の優しさと

は何かということを考えさせられる。もつとも直哉で云えば、「クロトディアスの日記」を書いた直哉も真実ならば、と同時に「父を失ひ、母が自分の好きでない叔父と結婚したといふだけでも、感じ易い若者には」「立派な悲劇は作りあげられる」と考え、「『ハムレットの日記』」を「少し書きかけた」（『創作余談』）という直哉もいることを忘れたくない。

太宰で言うならば、ことの虚実を扱置けばあれほど「優しさ」とは「人を愛へる、ひとの淋しさ恫しき、つらさに敏感な事」（昭21・4・30、河盛好藏宛書簡）と訴えながら、結果的には妻子の眼前で他の女性と心中するという「痛み」の感覚の不在をもとりこみたいと思うのである。

※この小稿を書くにあたって、本学英米文学科の朱雀成子、今井夏彦両教授からご教示をいただいた。とりわけ、シェイクスピアを研究なさっている朱雀教授には資料等便宜を与えられた。記して謝意を表したい。

注1 板垣直子「太宰治論」（『新潮』昭16・10）

注2 奥野健男「太宰治論」（近代生活社、昭31・2）

注3 磯貝英夫「『新ハムレット』論」（『二冊の講座太宰治』（有精堂出版、昭58・3）

相馬正一「戦時下の創作活動」（『評伝太宰治 第三部』、筑摩書房、昭60・7）

注4 相馬正一「戦時下の創作活動」（『評伝太宰治 第三部』、筑摩書房、昭60・7）



注5 注3に同じ。

注6 堤重久「恋と革命評伝・太宰治」（講談社、昭48・8）

注7 佐藤泰正「『新ハムレット』小論—『クローディアスの日記』と対比しつづ—」（『日本文学学の体系』88・11）

注8 山崎正純「『新ハムレット』論—表現の虚妄を見据える眼—」（『近代文学論集』昭61・11）

注9 津島文治「肉親が楽しめなかった弟の小説」（『噂』昭48・6）

注10 注7に同じ。

注11 河竹登志夫「日本のハムレット」（南窓社、昭47・10）

注12 山内祥史氏の「解題」（『太宰治全集第四卷』筑摩書房、一九八九・十二）によれば、太宰が参看したのは、『新修シェークスピア全集第二十七卷ハムレット』（中央公論社、昭8・9）であろうとの指摘があるが、ここでは「ハムレット」（『シェークスピア全集』創元社、昭27・5）に拠った。

注13 小山清「初めてたづねた頃のこと」（『筑摩書房版『太宰治全集』月報4』昭31・1）